

異世代交流空間としてのコミュニティカフェ

天野 敬子(東京都)

4年前、大正大学大学院社会福祉学専攻に入学した私は、「庚申塚商栄会協働プロジェクト」の推進メンバーとして活動することになった。これは、院の実践分析研究の授業の一環として行われる共同研究である。実践分析研究は、地域で調査研究したことをまとめて地域に還元していくという研究と実践が結びつくことをめざしていたが、そのフィールドを大正大学が位置する西巣鴨に移し、大学のすぐ近くにある商店街を拠点にするプロジェクトであった。そして、2005年5月15日、庚申塚商栄会の空き店舗を利用して、商店街との協働で、地域サロン「大正さろん」が誕生した。

大学院入学以前から、私は「不登校・ひきこもり研究所」という団体を立ち上げて、豊島区を中心に不登校・ひきこもりに関する支援活動をしていた。活動のテーマは「安心していられる居場所づくり」である。豊島区内に8つの居場所を創ることを夢として始めたが、「大正さろん」という一つめの居場所を創設することが出来たのである。

二つめとなる居場所「みんなのえんがわ池袋」が、2007年11月に池袋3丁目にオープンした。こちらは、としまNPO推進協議会(NPO法人申請中)という私が役員をつとめる民間団体が主催している。“出入り自由の縁側”をコンセプトに、仲通り商店会の空き店舗を利用して運営している。テレビの「ちい散步」に取り上げられたこともあり、手作りの「ふくろう縁ちゃん」(250円)がキャラクターとして人気を上げている。

これらの地域サロンには、子どもからお年寄りまで、さまざまな年齢の人々が訪れる。障害のある人もいればない人もいる。その中に、不登校の子どもたちも交じっている。これまでの不登校やひきこもりのフリースペースは、クローズドで行われているものがほとんどである。しかし、ひきこもりの人たちはひきこもりの人たちだけに会いたいわけではない。

いろんな地域の人たちと自然な形で交流することで元気を取り戻していく。高齢者も高齢者とだけ付き合いたいわけではない。子どもや若い人たちと接することで元気を得ることが出来るということを、地域サロンの活動を通して確信した。

昨年11月16日から、今度は雑司が谷の「子供村」で、「ワンダーグレープ」というコミュニティカフェを試みることになった。「子供村」は、株式会社ニュートンが社会貢献のために作ったフリースペースである。「ワンダーグレープ」の運営は、ひきこもりの若者たちが手伝ってくれる。彼らにとって就労体験の場となるのだ。これまでの居場所づくりで得たことを生かしながら、今度はコミュニティカフェとしての居場所づくりに着手する。「ワンダーグレープ」のテーマは音楽である。レコードをかけたり、近くの東京音大の学生さんにライブで演奏をしてもらう。鬼子母神の趣きのある参道に近く、この空間で新たな異世代間の交流が生まれることを願っている。コミュニティカフェや地域サロンが増えることで、誰もが安心して暮らせるまちに変容していくに違いない。

▼ワンダーグレープ



▼大正さろん



みんなのえんがわ池袋▶

